

薬師如来像とその薬壺と日本人の祈願

奥田 潤*

1. 日本への仏教の伝来

仏教はインドで紀元前5世紀に生まれたといわれる。その後、急速にアジア全体に広がって、日本へは中国や南アジア諸国から紀元後6～7世紀に伝来した。また中国から朝鮮を経て紀元後538（一説には552）年に百済の聖明王から伝えられ、その時仏像と経典、天蓋、旗印が欽明天皇に献じられ、仏教への帰依が熱心に説かれたという¹⁾。

日本では当時神道が信じられ、主に森、木、水、風、雷、石などが信仰の対象とされていた。朝廷では、587年崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏の争いが起こり、戦いは崇仏派の勝利に終り、以後仏教は宗教のみならず政治や文化の分野でも古代日本を導く基盤となった。しかし朝廷で行われる儀式はそれ以後も神道を中心に続けられた。

2. 古代日本における伝染病のまん延と、天災の発生²⁾

朝鮮、中国などとの人々の文化交流が盛んになるにつれて、6世紀頃から多くの伝染病が日本へ浸入し、まん延した。

伝染病には痘瘡、麻疹（はしか）、赤痢、黴毒、風疹、腸チフス、コレラ、癩、ペスト、結核、マラリヤ、インフルエンザなどがつぎつぎ発生した。なかでも痘瘡は日本で735年に蔓延し、種痘が行われるようになった明治初期まで31回もの大流行があった。またその他の伝染病もつぎつぎと流行し多くの人々が亡くなった。

さらに人々は嵐、早ばつ、地震などの天災に襲われた。しかし、病氣、天災をどのようにして防ぐか殆ど知識をもたず、多くの人々は絶望し、薬師如来像に薬師本願経を唱え、恐怖のなかで短い命を終えていったと思われる。

3. 薬師如来像^{3,4)}

仏像には多くの種類がある。

多くの仏像のなかでも最高位の4如来像が重要である。それらは釈迦如来（サンスクリット語（S）: *Sakiya*）、阿弥陀如来（S: *Amitäyus*）、大日如来（S: *Vairocana*）と薬師如来（S: *Bhaisajyaguru*）である。薬師如来は英語では Buddha of Healing（フランス語: *Bouddha de la Guérison*）と呼び、病人を治し、東方の浄瑠璃世界の教主で現世利益をもたらす如来である（釈迦如来、阿弥陀如来は死後來世の幸福をもたらす仏である）。

薬師如来の起源についてはよくわかっていない。最近清川は、インドのバラモン教

* 名城大学薬学部名誉教授（名古屋）

のバルナ神は正義の神で多くの薬をもち、人々の命を永らえる力をもつといわれ、薬師如来とよく似た性格を有することから、薬師如来像の原型はバラモン教のバルナ神ではないかという説を發表している⁵⁾。

薬師如来本願経(薬師経)は2世紀か3世紀にインドで書かれた後に5種の中国語訳が現れた。薬師経には12の所願が書かれ、第6願は諸根具足(身体障害者であっても薬師如来を信仰すれば治療される)とあり、第7願には除病安楽(病気が治り、心の不安が除かれる)と説いている。

薬師経には薬師如来像についてはっきりとした形容が示されていないので、薬師如来立像は通俗仏と同じ右手施無畏(不安を除去する)、左手与願(願いを叶える)の印相をもつといわれ、具体的には右手を屈肘し肩まで上げ、掌を前方へ向け、左手は垂下し掌を前方へ向け(薬壺をもつ)相をとっている^{3,6)}。

薬師如来は中国や韓国では広く信仰されなかった。しかし、日本では多くの人々が薬師如来を信ずるようになった。

中国の薬師如来像^{7~10)}

敦煌には椀や長い杖を右手か左手にもっている古い薬師如来像が立像か坐像の形で残っている。また、美しいの壁画が74存在している。

薬師如来本願経の中国語の翻訳には5種あるといわれ、その中でも唐の玄奘訳(650)が有名である。

中国には隋(581-618)または唐(618-707)時代の小立像が残っているが、像が小さいので薬壺を持っているのか椀なのかははっきりしない。

中国の僧不空(705-774)は薬師如来念誦儀軌(薬師経を唱えるときの規則が書かれている)を中国語に翻訳した。その中で薬師如来像の左手に薬器か椀を持たせると書かれている。

韓国の薬師如来像¹¹⁾

薬師信仰は中国から高句麗を経て南韓国の新羅へ移った。南韓国では薬師如来像としては国宝が金銅像1、鉄像1、石像1、磨崖仏1があり、14像が宝物として登録されていて、金銅像が2、鉄像2、磨崖仏1、石像9が知られている。18像のうち13像が薬壺をもっている。もっとも小さい像はソウル国立博物館にある高さ29cmの金箔ブロンズ像で、もっとも大きい像は牙山にある高さ545cmの石像である。

日本の薬師如来像^{3,4,6,12~14)}

中国や韓国では壁画、金銅像、石像が多いのに日本では桧などの大木が得やすかったためか木造の仏像が多い。

現存するもっとも古い木造の薬師如来像は7世紀につくられた法輪寺(奈良)のものといわれている。またもっとも古い金銅像は法隆寺金堂(奈良)のもので607(推古15)

年にいずれも止利という中国人が製作したといわれている。またもう1つの古い美しい金銅像は薬師寺(奈良)のものがあるが、3者はいずれも薬壺をもっていない。年代的に考えて多分止利は前述の不空が訳した薬師如来の「念誦儀軌」に薬師如来像には薬壺や椀を持たせると書かれたことを知らなかったものと考えられる。

薬壺を持たない薬師如来像に後代は薬壺を持たせた例が多く知られている(後補という)。薬壺を持っていれば薬師如来像ということができる。

薬師如来像はその脇侍として像の右側に日光菩薩,左側に月光菩薩を配し,その外側は護法神である四天王(東:持国天,南:増長天,西:広目天,北:多聞天)に四方を守られている。さらに眷属として薬師如来の十二の大願に依じて現れる十二神将が仕えている。これらは晝夜十二時を護るため頭に十二支獣をつけている。これが薬師如来像一揃となる(写真1, Page 5)。

4. 日本の薬師如来像の薬壺^{6,12~17)}

現存する薬師如来像で重要文化財として登録されている彫刻像は247あるがその中に国宝14像が含まれている。これらの多くは奈良時代(645-793)と平安時代(794-1184)の作が多いが247のうち,224が木造,17が金銅造,4が石造,2が鉄造である。247のうち191像(77.3%)が薬壺,椀,宝珠をもつが,その中には何も入っていないといわれてきた。

醍醐寺(京都)に913(延喜13)年につくられた国宝の木造薬師如来像(176.5cm)がある(写真2, Page 5)。その薬壺は当初(如来像と同時につくられた)のものといわれ7つの線が縦に彫り込まれている(写真3-No.3, Page 6)。その形は覚園寺(神奈川)のそれと似ているが,12本の線が縦に入っている(写真3-No.7)。秋篠寺(奈良)のものは7本の線が入っている(写真3-No.11:妙光寺(京都)の例は写真を省略)。

いくつかの薬壺は当初のものより平安後期以後に後補されたものが多い(表1, Page 7)。薬師如来像の大きさは通常1.5-2.0mであるが,薬壺は高さが6-20cm,直径が6-15cmで蓋の部分には装飾が施されている。また金箔が張られているものもあり,殆どが木の塊である。薬師如来像は秘仏のものもあり,住職ですら薬壺に触ったことがないといわれ,その場合は薬壺の内容物があるかどうかわからない。写真3の薬壺12のうち, No.9とNo.10は椀である。

その他に薬師如来の画像で重要文化財に登録されているものが7件あり,もっとも古いものは700(文武4)年につくられた法隆寺の壁画であるが,1949(昭和24)年火災により一部焼損しているが薬壺をもっているといわれる。その他掛軸のものが6点あり,櫻池院のものは美しくその大きさは縦161.1cm x 横130.9cmである(薬壺は写真3-No.12に示す)。別に墨で画かれた5図像があり椀か薬壺をもっている。

5 . 周防国分寺の薬師如来像の薬壺の内容物^{12,13,15~17)}

ごく最近，山口県防府市の周防国分寺金堂の解体修理が行われ，1997(平成9)年9月に本尊の薬師如来像が所持する薬壺に内蔵物が存在することが判明した(写真4，Page 10)。同寺は室町時代(1417)に焼損し，その後薬師如来像(高さ：195.1 cm)が新しく作製されたが，薬壺の蓋の裏に今から約308年前の1699(元禄12)年10月12日と日付が記載されている(写真5，Page 11)。絹の3角巾に220gの供物を入れ薬壺の中へ納め，木製の小五輪塔も添えて木釘で封をしたものと思われる。

薬壺は高さ18 cm，直径13 cmで薬師如来坐像の左手の掌の上に置いてある(写真1，Page 5，写真4，Page 10)。薬壺本体は明るい青い色に塗られ縦に12本の筋が金で書かれている。内容物の17.2gについて分析した結果は表2(Page 12)に示した通りである。

穀類

最初は肉眼で分類した。

粳のついた米，外皮のついた大麦，小麦，大豆，小豆の5種が入っていた。米は褐色がかかった外皮をもち短い芒があり，小ピンク褐色米種であった。胚乳はうるち性である。米のDNAを分析した結果，温帯性ジャポニカであることが判明し，日本でもっともよく栽培されていた品種であることが確認された。

オオムギは皮麦でそのうちでも六条皮麦であると判断された。オオムギについては日本の北部には皮麦が多いが，瀬戸内海でははだか麦が多く，皮麦が周防国分寺にどうして持ち込まれたか理解されていない。コムギは普通コムギであると考えられた。その他の2種の種子については走査電子顕微鏡によってそれぞれダイズとアズキと確認された。これらの種子について発芽実験を試みたがいずれも成功しなかった。

1699(元禄12)年秋周防国分寺地区は嵐により大被害を受けた。そこで人々は薬壺の中に五穀を入れ，1700年以降の豊作を祈ったと思われる。

生薬類

薬師如来像へのお供えとして生薬類は当然と考えられた。薬用植物(生薬)類については細切物であったので肉眼でまず大別し，組織標本を作製し，光学顕微鏡，走査電子顕微鏡を用いて精査した。

石菖根，菖蒲根はいずれも芳香精油分を含み，発熱，けいれん，外傷に有効である。人參，丁子，白檀は韓国，インド，東南アジアからの輸入品と考えられる。

人參は強壯，強精，興奮作用をもち，丁子は健胃作用があり，ベータ・カリオフィレン，オイゲノールを含み，防腐剤としても用いる。白檀は線香の材料であり，淋病の薬でもある。したがって，住民は病気の治療と健康を願って5種の生薬を薬壺に納入した

のであろう。

納入生薬の中に丁子が含まれていたため、その成分であるオイゲノールはフェノール性誘導体であり殺菌性をもち、穀類生薬類を虫やバクテリアによる害から300年間守ったものと考えられる。

鉱物類

鉱物の元素分析は蛍光X線元素分析機を用いて分析した。

白水晶は珪素が100%、比重、屈折率から極めて純度の高い水晶であることが判明した。紫色ガラス、青色ガラスは元素分析と比重測定の結果、古い鉛ガラスであることが判明した。また球状石灰石は温泉噴出部に見られるものが納入されたと考えられ、同種のものが白骨温泉や高瀬渓谷において天然記念物として知られている。銀箔、金箔が見出されていたが、純度は前者は銀49.6%、後者は金6.6%、銀4.3%を含有し、珪素が多く含まれていた。これらの鉱物類は当時貴重品であり、御利益を願って納入したものである。

6. 薬師如来像とその薬壺への日本人の祈願¹⁸⁾

1) 飛鳥(A.D.593~709)、奈良(A.D.710~793)時代の朝廷による薬師如来祈願

薬師経には薬師如来を信仰すれば病気が治り、現世利益が得られると書かれている。天武天皇は皇后(後の持統天皇)の病氣平癒を願って680(天武9)年薬師寺建立を発議した。薬師寺は天武天皇の死後、持統天皇によって698(文武2)年に奈良で完成した。

741(天平13)年聖武天皇は国内国府の所在地に国を守り、上述のごとくまん延する伝染病などから国民の健康を守るため国分寺、国分尼寺を建立する詔を発した。現存する38国分寺のうち32寺の本尊は薬師如来像である。

このように奈良時代、日本の朝廷は韓国、中国の文化を吸収しながら、病気の治療と国防という現世利益を薬師如来へ託し、その信仰のイニシアチブをとったものと考えられる。

2) 庶民による薬師如来祈願

重要文化財に登録されている4種の如来像のうちもっとも数が多いのが阿弥陀如来像で、薬師如来像は2番目に多く、薬師如来は多数の信者を昔からもっていたと思われる。

奈良、平安時代につくられた日本の薬師如来像は造像時には薬壺をもっていないものが多いが、庶民が薬師如来像に薬壺を持たせるよう寺側に要望したためと考えられるが、平安後期以降に後補という形で薬壺を付けた場合がかなりある。寺側も薬壺をもたせれば信者が増えたことから薬師如来像に薬壺をもたせる像が増えたものと考えられ

る。現在では重要文化財の薬師如来彫刻像 247 のうち 77.3%に当る 191 像が薬壺，薬椀もっている。

3) 和讃・詠歌による薬師如来讃歌

佛を讃美する時和語で歌われるのを和讃という。一方，和讃の一種で日本の和歌と仏教の習合作用の結果，四国四十八ヶ所などの霊場を巡礼する時のような場合，哀調な節を付けて歌われるようになったのが御詠歌である。薬師如来に関するものでは鎌倉流薬師如来霊験和讃，御詠歌は有名である。庶民はこれらの和讃・御詠歌を通じて薬師如来を信仰していったものと考えられる。

7. 薬師如来像を主尊像とする寺院による医療¹⁹⁾

仏教が日本へ導入されると，中国，韓国の文化に接した僧侶は仏の経典に書かれた医術を学び，薬をつくり，庶民の病気の治療に役立てようとした。特に医療と深い関係の薬師如来像を主尊像とする周防国分寺の記録によると，薬壺をとりつけた当時(1699)，日本でもっとも古い疫病の治療薬である「豊心丹」の製法を奈良西大寺より習い，その材料である人参，白檀，丁子などの外来生薬は輸入し，「豊心丹」を調製し疫病にかかった庶民に配布していたとある。

また，尾張国馬島村の明眼院は古くから医王薬師寺とよばれていたが，南北朝時代(1336~1392)清眼僧都が薬師如来の霊験によって眼病治療の秘法を会得し，それ以来，同寺で多くの眼病人を助けたという。江戸時代に後水尾上皇の女三の宮の眼病を治した巧によって明眼院となり，日本中から患者が集まったという。同様に 10 薬師寺が眼病治療の寺として有名になった。

8. 考察

日本は島国であるためか，われわれの先祖は外国の優れた文化に鋭敏に反応し，それらを取り入れることに懸命であった。天災を防ぐことを知らず多くの犠牲者を出したが，文化の輸入と共に人々の交流が盛んとなり，同時に多くの伝染病が日本を襲った。1 度伝染病がまん延すると人々はなす術もなく，朝廷は僧侶に薬師経を読ませ，祈祷し，ひたすら病気が鎮静化するのを待つのみであった。そのため，病気に用いる生薬の輸入に努力した。日本人が薬好きな国民になった背景には，中国，韓国にはない朝廷による薬師如来信仰のイニシアティブと庶民による薬師如来像と薬壺に対する信仰が基盤となったものと思われる。さらに薬師如来は，病気を治療する現世利益の仏であったことが，薬師如来の信仰を盛んにしたものとする。

日本人の宗教心についての最近の調査の結果によると 33%が仏教，4.2%が神道，1.2%がキリスト教，5.6%がその他の宗教の信者であり，3.4%は不明で，残りの 52.6%は無宗

教者であるという²⁰⁾。また、一般に幸福感が増大すると、宗教の信仰から人々は逆に離れるといわれている。日本では人々の高齢化が進み、多くの人々が種々の病気(ガン、心疾患、脳血管疾患、肺炎など)や死の到来に直面するようになった。結果として多分、心の安らぎを求めて仏へ戻り、またははじめて仏に接するようになるだろう。したがって薬師如来が病気を如何に治療し、死の怖れから人々を如何に救うか興味のある問題である。

9. 結論

日本には薬師如来像は重要文化財だけで 247 (国宝 14 像を含む) 存在する。薬師如来の本願経には 12 大願が揚げられ、その第 6 願には不具者を救い、第 7 願では病人を治療すると書かれている。そこで人々は奈良時代 (710-793) 以降薬師如来像を信仰してきた。上記 247 像のうち 191 像が薬壺 (薬椀) をもっているが木の塊である。

最近、周防国分寺 (山口県防府市) の薬師如来像は左手の薬壺の中に 220 g の内容物 (お供え) をもち、薬壺の蓋の裏の文字から 1699 (元禄 12) 年 10 月 12 日に封入したことが明らかになった。内容物としては 5 穀と 5 生薬、6 鉱物が入っていて、豊作と病気の治療と御利益を願ったことが明らかになった。

薬壺の中に内容物が発見されたのはこの例のみであるが、今後同様な例が見出されれば、人々が薬師如来に何を祈ったかさらに明らかになると考える。

謝辞

本研究を支え、その折々に御指導いただいた前文部省文化庁主任研究員伊東史朗氏に感謝したい。また薬師如来像薬壺の撮影の許可とアンケートに御返事いただいた多くの寺の住職にお礼申し上げ、周防国分寺住職福山秀道氏には同寺薬師如来像の薬壺内容物の分析に御許可いただき謝意を表したい。

また、同内容物のうち生薬の分析に御協力いただいた名城大学薬学部野呂征男名誉教授、久田陽一助教授、奥田和代助手、川村智子講師、鉱物類の分析に御援助いただいた山梨県立宝石美術専門学校宮田雄史教授、米の DNA 分析に御協力いただいた静岡大学農学部佐藤洋一郎先生に、また大麦、小麦、大豆、小豆の分析に御助力下さった北海道大学椿坂泰代博士、札幌国際大学吉崎昌一教授にお礼申し上げます。

文献

- 1) Seiichi Mizuno: Asuka Buddhist Art (Horyu-ji) (in English), Heibonsha (Tokyo), (1974) .
- 2) 奥田 潤, 飯田耕太郎: 6 年制薬学生のための薬学史資料, 「日本史に現われた主な疾病年表」の作成, 薬学史雑誌 40(2), 137-146 (2005) .

- 3) 伊東史朗：日本の美術 (No.242) 薬師如来像，至文堂 (東京)，(1986)。
- 4) Jun Okuda: Yakushi Nyorai (Buddha of Healing) Statue with Medicinal Pot in Japan, 32nd International Congress for the History of Pharmacy (Paris), (1995)。
- 5) 清川理一郎：薬師如来，謎の古代史，彩流社 (東京)，(1997)。
- 6) 奥田 潤，伊東史朗：薬師如来像の薬器 (壺)，薬史学雑誌，32(2)，235-254 (1997)。
- 7) 永井信一：中国の薬師像，仏教芸術，159，49-62 (1985)。
- 8) 中国石窟 敦煌莫高窟 (敦煌文物研究所編) 第1～4巻，平凡社 (東京)，(1980)。
- 9) 松原三郎：中国仏教彫刻史論，吉川弘文館 (東京)，(1987)。
- 10) 高橋順次郎：薬師如来念誦儀軌一卷，大正新修大蔵経 11，密経部二，大蔵出版，p29 (1963)。
- 11) 黄 寿永：国宝・韓国 7000 年美術大系，2，4，10 巻，竹書房 (東京)，(1985)。
- 12) 奥田 潤，久田陽一，奥田和代，川村智子，野呂征男，宮田雄史：周防国分寺薬師如来像の薬壺の内蔵物，薬史学雑誌，33(1)，49-62 (1998)。
- 13) Jun Okuda, Yukio Noro, Shiro Ito: Yakushi Buddha (Buddha of Healing) and Its Medicinal Container in Japan, Pharmacy in History (Madison), 41(No3)，102-109 (1999)。
- 14) 文化庁：国宝・重要文化財 ～ ，毎日新聞社 (東京)，(1997~2000)。
- 15) 佐藤洋一郎，椿坂泰代，吉崎昌一，奥田 潤：防府市周防国分寺の薬師如来像の薬壺に内蔵されていた穀類種子の分析，薬史学雑誌，35(2)，128-134 (2000)。
- 16) Jun Okuda: Yakushi Bouddha ou Bouddha de la Guérison, Dictionnaire d' Histoire de la Pharmacie (Soc. Hist. Pharm.), Pharmathèmes (Paris), 431 (2003)。
- 17) Jun Okuda, Yukio Noro, Shiro Ito: Les Pots de Médicament de Yakushi Bouddha (Bouddha de la Guérison) au Japon, Revue d' Histoire de la Pharmacie (Paris), 53(345)，1^{er} Trim, 7-32 (2005)。
- 18) ミルチア・エリアーデ：世界宗教史 8 巻 (荒木美智雄) 50 章，211-259，筑摩書房 (東京)，(2000)。
- 19) 服部敏良：日本医学史研究余話，291-297，科学書院 (東京)，(1981)。
- 20) 中日新聞サンデー版，世界と日本 No.670，中日新聞社 (名古屋)，(2月13日，2005)。